

「大峯堂と住道駅前のにぎわい」



八尾枚方線から東へ200メートルほど進むと、フェンスに囲まれたお堂が左手に見えてきます。お堂には「大峯堂」と書かれた表札が掛けられ、修験道の祖・役行者が祭られています。修験

験道とは、奈良時代に日本古来の山岳信仰と仏教が融合してできた宗教で、霊場（修行の場）として知られた大峯山（奈良県）へは昔から多くの人が参詣に訪れました。

大峯堂は、大峯講という信仰集団の拠点で、50年ほど前に赤井北野神社の南側から現在地に移ってきました。かつては、「男は一生に一度は大峯山に参らなければいけない」と言われ、毎年村の有志が修行のため大峯山に参り、村に帰って来ると大峯堂で護摩を焚き、修行の無事に感謝したそううで



大峯堂と道標

す。また、大峯山参詣は適齢期の子どもが大人入りする儀式としても行われました。

大峯堂の手前には「左大坂、右大峯山三十三度道」と刻まれた道標があり、古堤街道が大峯山への参詣ルートとしても利用されていたことが分かります。この道標は明治18年（1885）に建てられたもので、生駒宝山寺や奈良、伊勢などの行き先も刻まれています。

大峯堂を後にし東側の墓地を越えると、JＲ住道駅北側のロータリーに出できます。付近には多くの商店や飲食店が並びにぎわいを見せています。ロータリーからスロープを上がって行くと、待ち合わせ場所やさまざまなイベント会場として利用されている駅前デッキに出ます。デッキの真下は恩智川と寢屋川の合流地点となっていますが、かつてここには角堂浜と言われ、船着き場がありました。次回は、在りし日の角堂浜をご紹介します。

（生涯学習課）



住道駅北側の繁華街